



伊豆半島ジオパーク News Letter

今号のトピックス

- ・ 地質物品に関する講演会
- ・ パートナーシップの取組
- ・ ジオリアでの展示とイベント
- ・ その他イベントレポート
- ・ ジオパーク学習
- ・ 域内・国内・世界とのネットワーク
- ・ 次世代ジオガイド研修
- ・ ジオパーク委員会の様子

地質物品問題に関する講演会を開催しました

11/20



＜鬼丸昌也氏＞

NPO法人テラ・ルネッサンス創設者・理事の鬼丸昌也氏を講師に迎え、ジオパークがなぜ地質物品の売買防止に取り組んでいるのかについて理解を深める講演会を開催しました。

講演では、レアメタル（タンタル、タングステン、コバルトなど）の採掘が引き金となったコンゴ紛争の事例を通して、その背景にある問題が解説されました。

鉱物採掘の現場で実際に起きている児童労働や、誘拐・強制的な徴兵によって戦闘や支援活動に従事させられる子ども兵の実情を、現地での活動の中で実際に目の当たりにしてきた講師の言葉は非常に心に響くものでした。私たち一人一人が、岩石・鉱物の販売や流通の背後に、搾取や暴力が潜んでいる可能性があることを意識する重要性を改めて考える機会となりました。また、遠く離れた場所で起きている悲劇であっても、私たちが日常生活の中でエシカル（倫理的）な消費を心がけることで、その一部を緩和できる可能性があること、そして、そのためには「知ること」そのものが欠かせないということを再認識する講演会となりました。

CONFERENCE



＜講演会の様子＞

11/18

ジオパーク

食 × 学び 静岡ガスグループとの連携事業

「清流に育つアマゴを訪ねて」

アマゴ養殖の現場を見学しました。訪れたのは狩野川の支流である柿木川の上流です。下山養魚場の周辺にはわさび田が点在しており、水の流れる音が聞こえます。このわさび沢の水を使ってアマゴが養殖されています。神経質で一般的に養殖に向かないと言われているアマゴの養殖を可能にするのは、この静かな環境と、ふんだんな水量の天城の澄んだ湧水なのだそうです。ちょうど抱卵の時期だったこともあり、黄金色のイクラの採卵体験をさせていただきました。昼食に「紅姫あまご漬け丼」を堪能した後は、旭滝やジオリアで地質や水の流れの仕組みを観察し、伊豆半島の川の恵みを満喫する1日となりました。



<わさび沢の水が引かれた養殖場>

11/24

あゆつぼ

「鮎壺の滝で水鳥探そう」

この日は日本野鳥の会を講師に招き、鮎壺の滝と滝のある黄瀬川でバードウォッチングを開催しました。

参加者は20名で、主に県東部からの参加者が目立ちました。事前レクチャーでは、伊豆半島の成り立ちとジオパークのみどころである鮎壺の滝について学び、実際に野外に出てからは野鳥を観察しながら風景も楽しむことができました。地元の菓子店による鳥の形をしたクッキーをお土産に解散。バードウォッチング初心者でも楽しめる内容であったと好評でした。



<鮎壺テラスから水鳥さがし>

静岡大学とのジオ福連携

Shinjuku
Prefecture
Japan
Geopark

福祉と何かを掛け合わせる「〇〇福連携」が盛んに議論される時代になっています。たとえば農業、伝統工芸などの分野は高齢者やハンディを持つ方が生きがいや居場所を見つけられる場とされ、農福連携、伝福連携という言葉が産まれています。

そして伊豆半島では、地域福祉が専門の静岡大学の内山智尋准教授の下、ジオ福連携という世界最先端のコンセプトが産まれました。「ジオパークの活動やガイド仲間が生きがいや居場所を創る」、「ジオパークの視点を取り入れたコミュニティ防災で、災害時に高齢者の被害を減らす」、そんな姿を目指した取り組みが始まろうとしています。

写真は、11月28日にジオ福連携の一環で開催されたモニターツアー「里山の未来をつなぐ集い～竹林整備から考える、里山のこれから～」の様子。里山に手を入れ、生き物が棲みやすい環境を作ることが私たちの豊かな生き方や防災にもつながることを学びました。



<循環させる森林整備>

6/12
～
9/16

ジオリア巡回展展示



<各ジオパークの研究者が手がけた展示物>

伊豆半島ジオパークミュージアム・ジオリアにて、巡回展「ジオパークでえがく黒潮の道」を開催しました。企画展では海流としての黒潮の特徴や大蛇行の影響、黒潮と沿岸地域の生き物や人々の歴史・文化との関わりに焦点を当てて紹介しました。展示に合わせて、ジオリアでは黒潮にちなんで2つのイベントを開催しました。黒潮が運んだ流木をつかったオブジェ作りや、サンゴをテーマにしたトークショーを通して、黒潮や海の環境について理解を深めました。期間中ご来館いただいた5,000人近くの方に見ていただくことが出来ました。春に室戸で始まった巡回展も、夏の伊豆半島、秋の土佐清水での展示を終え、冬の南紀熊野会場で締めくくります。

8/2

企画展関連ワークショップ

「黒潮が運ぶ流木で作るミニオブジェ」

『ジオパークでえがく黒潮の道』展と関連し、ワークショップを開催しました。冒頭でジオパークの佐々木専任研究員が、黒潮が運んでくる植物や生き物の話をすると、参加者からは積極的に質問がありました。講義の後は、同じく黒潮にて運ばれてくる流木を使った一輪挿し等のオブジェを作成しました。慣れない工具を使いながら二つと同じ形のない流木とシーグラス、シー陶器を使ったオリジナルのオブジェを作成しました。参加者からは、「お話も制作も楽しかった」と満足の声をいただきました。



<流木を使った一輪挿し>



<黒潮の話に耳を傾ける参加者>

9/6

企画展関連トークイベント

「ジオカフェ 黒潮とサンゴを語る」



<南紀熊野と会場をオンラインでつないだ>

「ジオパークでえがく黒潮の道」展と連動してジオカフェを開催しました。登壇者は3名の専門家で、サンゴ化石から見る地球環境（南紀熊野ジオパーク本郷専門員）と、生きものとしてのサンゴ（東海大学海洋学部中村教授）、そしてサンゴの生息現場での保全活動を行うダイバー（ジオパークガイド朝倉氏）、それぞれの視点から伊豆半島を取り巻く海の環境について話題にしました。南紀熊野とオンラインでつないだ会場には30名が集まりました。黒潮とサンゴを切り口に、身近な伊豆半島の海と、地球規模の環境変動を多角的に捉える場となりました。また、南紀熊野という地理的に離れたジオパークでも、共通の環境による繋がりを見出すこともでき、改めてネットワークの可能性を感じました。

10/23
～
12/9



＜世界各地のパンフレットなども展示＞

企画展

「チリで出会った世界のジオパーク」

9月に南米・チリ共和国で開催された第 11 回ユネスコ世界ジオパーク国際会議 (The 11th International Conference on UNESCO Global Geoparks) の概要を報告し、チリで出会った世界のジオパーク関係者との交流を紹介しました。開催地のクトラルクラ (Kütralkura) ジオパークの見どころをパネルで紹介したり、国際会議で出会った各地のパンフレットやオリジナルグッズを展示して、海外のジオパークへの理解を深めもらうきっかけとしました。

8/23

ワークショップ

「タカアシガニの甲羅に描く伊豆半島ジオパーク」

出張ジオリアワークショップとして、沼津市戸田にある沼津ビジターセンターを会場に、戸田地区で魔除けとして作られているタカアシガニの甲羅面の成り立ちや作り方を学び、実際に自分だけのお面を作るワークショップを開催しました。

修善寺を飛び出して出張ワークショップとして沼津市で開催したこと、ジオリアワークショップに初めて参加したという人が多かったです。参加者からは、「4歳の子どもでも楽しく体験することができました。」と家族で楽しく参加してくれる様子のわかる声をいただきました。

出張
ジオリア
GEORIA



＜個性あふれるお面が出来ました＞

第2回ジオパーク委員会を開催しました

11月 20 日、修善寺総合会館にて第2回ジオパーク委員会を開催しました。今年行われたユネスコ世界ジオパーク再認定や、令和7年度の事業実施報告、エコツーリズム推進全体構想についての報告をおこないました。また、令和8年度事業計画及び予算やジオパーク產品認証制度についての協議が行われました。

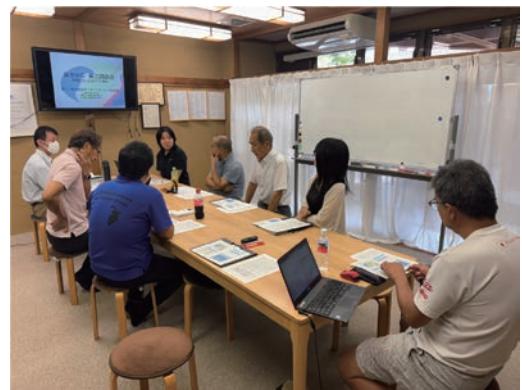
產品認証制度については、伊豆半島の地質、植生、気候、歴史、製法などに根ざしたストーリーを持つ特產品の認証、そして生産活動自体が地球温暖化防止、景観保全、生物多様性保全、水利用、文化保全、包摂社会、畜産物の幸福などに貢献するサステナブル產品の認証の 2 種類を想定し、専門家の審査を経て認証を受けたものに認証シールを発給することを説明し、承認されました。

市民とのワーキンググループ

伊豆半島ジオパークでは、次期基本計画 2026～2030 の策定にあたり、地域の方の声を取り入れるため、「保全」、「教育」、「持続可能な地域づくり」の3つの分野でワーキンググループ（以下、WG）を立ち上げ、老若男女問わず様々な方にご参加いただいています。



各地でミーティングを開催しています



WG では各々の立場を超えて、時には和気あいあいと、時には真剣な面持ちで、伊豆半島ジオパークをより良くするための様々な提案や意見が活発に飛び交っています。現在は、次期基本計画の原案作成に向け協議を進めています。作成した答申は、今後のジオパーク委員会や（一社）美しい伊豆創造センターの理事会で諮ったのち、次期基本計画に反映していきます。

国際青少年フォーラム in 室戸ジオパーク

8/4-7



室戸ジオパークの高校生たちと

葦山高校の教諭 1名と生徒 2名とともに、室戸ジオパークで開催された青少年フォーラムに参加してきました。香港ジオパークからも 16名の高校生が参加し、使用言語はすべて英語！「地域のために行動する人『ジオーカル・プレイヤー』になろう！」を合言葉に、国内ジオパークの高校生約 30名（6 地域）が英語でスピーチを行う等、大奮闘しました。印象的だったのは、学校教育でジオパークと出会い、地元に対するものの見方ががらりと変わったという生徒の話。海外のジオパークを訪れ、人の優しさに触れ、地元の良さに目を向けられるようになったとのこと。若者が地元に住み続けたいと願う、ジオパークにはそんな地域づくりの一端を担える力があるのだと実感する機会となりました。

9/27
～
9/28

第 15 回日本ジオパーク全国大会十勝岳大会

北海道美瑛町、上富良野町で開催された大会にジオパーク担当理事の山下正行伊豆の国市長をはじめ、事務局 4名、ジオガイド 3名と参加しました。開会式では、伊豆半島の住康平氏が、長年にわたり取り組んできたジオパークと現代アートの融合をテーマとした活動が認められ、表彰されました。また 3名のジオガイドはそれぞれ口頭発表や分科会で事例紹介を行いました。交流会やエクスカーションでは他のジオパーク関係者と交流し、今後の連携について協議を行いました。



功労者表彰式の様子

国際フォーラム in ハンタンガンジオパーク



<海外のジオパークとの交流>



APGN
ASIA PACIFIC
GEO PARKS
NETWORK

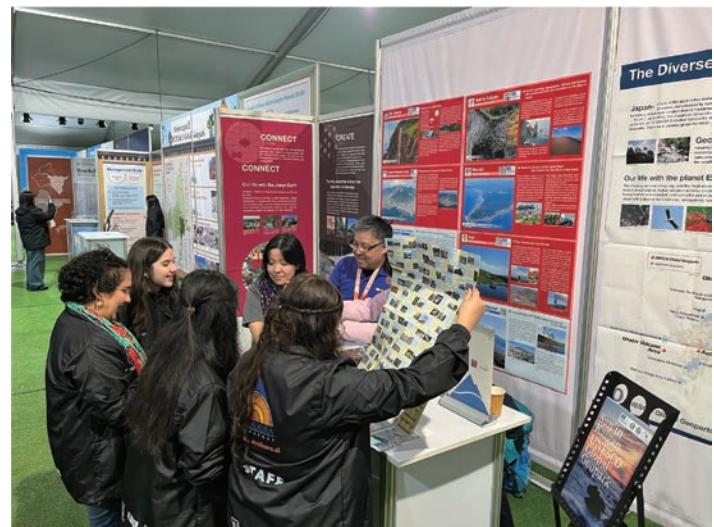
第 11 回ユネスコ世界ジオパーク国際会議に参加

ジオパークでは他地域との連携や好事例の共有を通して、ネットワーク全体の質の向上や発展を目指しています。そのため 2 年ごとに国際会議が開かれ、世界中のジオパーク関係者が集まって交流がおこります。今年は 9 月 8 日から 12 日（いずれも現地時間）にかけて、チリ南部の都市テムコにて第 11 回ユネスコ世界ジオパーク国際会議が開催され、伊豆半島からは 3 名が、世界各地から 700 名以上の関係者が参加しました。“先祖伝来の知識から未来のジオパークへ”というテーマが掲げられ、先住民の文化強く根付く開催地にふさわしい内容でした。総会や祝賀行事に加え、テーマごとの事例発表や討論、見どころを巡るツアーを通じて、



<先住民の文化を前面に打ち出した開会式>

10 月中旬には、北朝鮮との国境にある韓国のハンタンガンジオパークで、8 力国 23 地域のユネスコ世界ジオパークが一同に集まる国際フォーラムが開催されました。一般参加型イベント（ジオパーク地域を紹介するブース、物産フェア）に加え、ジオパークをより一層盛り上げるための創意工夫を共有する事例発表会が催されました。会場には国内の世界ジオパーク国際連携担当が勢ぞろいし、各地のネットワーク活動について意見交換する絶好の機会となりました。また、今夏の世界再認定審査の調査員とも再会。海外のジオパーク地域と交流したこと、国際交流活動がいくつか始まる予感がします。



<日本ジオパークネットワークのブースにて>

ふだん顔を合わせることの少ない世界中のジオパークの仲間たちと交流を深めました。



<アンデス山脈へのトレッキングに参加>

ジオパーク学習

8月から11月にかけて、小学校11校、高校2校にて、理科や総合などそれぞれの学科・分野でジオパーク学習を行いました。ジオパークガイドとともに伊豆半島の成り立ちを実験等によって学び、学んだことをフィールドワークで実際に見て知識を深めました。



＜学校での座学＞



＜ジオリア見学＞



＜火山噴火の仕組みを実験で学ぶ＞

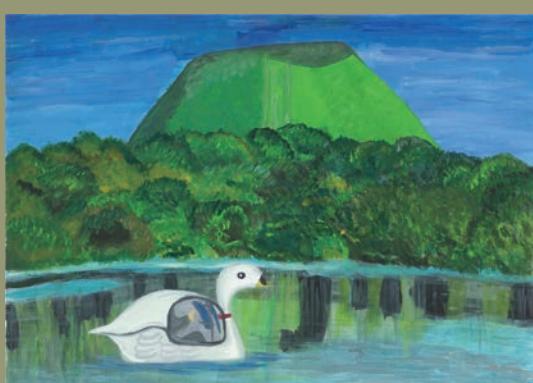
伊豆半島ジオパークでは、ジオパーク学習を地球のダイナミックな営みを知ると同時に、自然と共に生きる知恵を学ぶ機会として捉えています。この学びが、これから社会を生きるための「考える力」と「地域への愛着」を育て、伊豆半島の未来へつながっていくよう今後も尽力していきます。

伊豆半島ジオパークこども絵画コンクール

(協賛: サントムーン柿田川、三島信用金庫)

今年も伊豆半島各地から皆さんの素晴らしい作品が集まりました。

今年の応募総数は166点！その中から3部門各13点、合計39点の入賞作品が選出されました。12月21日(日)には、修善寺総合会館で表彰式が行われ、入賞作品は、令和8年2月までの間、伊豆半島各地で展示しています。

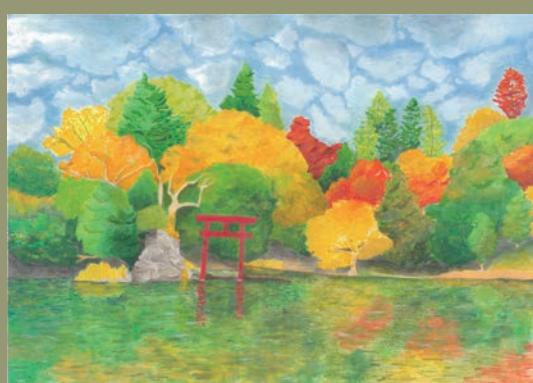


小学1～3年生の部 最優秀賞

小野 ひかりさん

「いっべき湖こめんからの大むろ山」

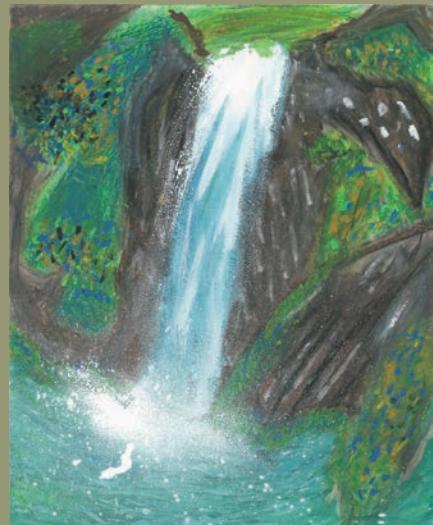
大むろ山といっべき湖が重なった景色がきれいだと思いこの絵にしました。実物を見にいって大むろ山からいっべき湖までようがんがながれだすすごさをかんじました。



小学4～6年生の部 最優秀賞

長谷川 結衣さん「秋の一碧湖」

一碧湖は学校の近くにあってよく学校の遠足で友達と遊んだりさんぽをしたりと色んな思い出があったのでいつもありがとうございますという思いを込めました。



中学生の部 最優秀賞

杉山 遼太さん「浄蓮の滝」

目の前に広がる滝の迫力に圧倒され、その時の感動を描きました。飛び散る水しぶきを絵具を飛ばしたり白く細かく描いたりして勢いと涼しさをリアルに表現しました。滝の水の透明感も水色と白を重ねて描くことでこだわりました。

若旅プロジェクト～大学生の音声ガイド～

若旅プロジェクトは、静岡県立大学や静岡文化芸術大学の学生たちが、静岡県賀茂地域局の支援により立ち上げたプロジェクトです。昨年度、河津七滝と湯ヶ野を舞台に、自分たちで歩いて出会った魅力あるスポットを紹介する音声ガイドを作成しました。今年度は下田市にあるジオパークのみどころを、地元の小学生やジオガイドとともに音声ガイドにしました。音声ガイドは、伊豆半島ジオパークのウェブサイト上で、該当の見どころページから聞くことができます。また、河津と下田の音声ガイド一覧ページも用意しておりますので、ぜひ河津や下田に訪れる際は学生目線でのジオパークの魅力を確認してみてください。<https://izugeopark.org/audioguide/>

次世代ジオガイド研修

9月にJGN全国大会では「海と人をつなぐジオガイド活動@朝倉一哉氏」「AIを活用した伝わる英語ガイドの実践@小松正人氏」「ユネスコ世界ジオパーク再認定現地調査対応@堤麻理氏」の3名がそれぞれ口頭発表を行い、若手ジオガイドの活躍に多くの反響がありました。

箱根ジオパークとの交流事業の一環として相互に訪問し、互いの地域の特徴を学び、ガイドスキルの向上につながる研修を行いました。

富士山世界遺産センターでは当センターで活動する参加メンバーの加賀美剛氏を講師に今後のツアー造成に活かすためのガイドツアー研修を行いました。



＜箱根ジオパークでの研修＞

部長コラム

「三角形の重心は重さの中心を意味し、三角形の板をその点で支えると釣り合う位置である」

いきなり、なんのことだろうと思うかもしれません、私はジオパークの事務局とは、そんなものなんじゃないかと感じています。日本のどこにいっても、ジオパークには役場、会社、学校などなど、いろんな立場の人や団体が関わっています。みんな見ている夢や考え方方が違います。美しい理想を語れば誰もが涙を流して仲良く肩を組むなんてできるはずもなく、むしろ、人間らしい激しく生々しい感情のぶつかり合いを目にすることもあります。では、そんなとき事務局はどうするべきなのでしょう。私の脳裏を過るのは重心という言葉です。中心ではなく重心。どの角からも少し遠いその場所に私はいるだろうか。そう自分に問い続け、板を静かに支える一点を探し続けることは、事務局を預かる者の責務であろうと感じます。

